

インドネシアにおける 高校日本語教師研修に関する一考察

西ジャワ州・東ジャワ州のビリーフ調査結果を通して

小原亜紀子・栗原明美

〔キーワード〕インドネシア人高校日本語教師、ビリーフ、教師研修、コミュニケーション重視

〔要旨〕

インドネシアで国際交流基金ジャカルタ日本文化センターが実施しているインドネシア人高校日本語教師研修をより効果的なものにするを目的として、西ジャワ州と東ジャワ州のインドネシア人教師を対象としたビリーフ調査を実施した。その結果、彼らは、現在のコミュニケーションを重視した授業内容及び授業方法については肯定的に捉えているものの、具体的な学習スタイルについては文法を重視していることがわかった。すなわち、「コミュニケーション重視の授業」を漠然としたイメージで捉えており、コミュニケーションに重点をおいた学習方法は具体的には把握できていないということである。このことから、今後の研修の改善点として、1) 教授法の理論を補強し、それを実際の教授活動と結びつける方法を考える時間を作る、2) コミュニケーション重視の授業を実際に体験し、実際の高校での授業との関連を考える時間を設ける、といったことが考えられる。

1. はじめに

インドネシアでの日本語教育は、中等教育機関（高等学校）がインドネシア国内の日本語学習者の7割以上を占める点が特徴的である。学校数は約430機関、教師数は約530人、学習者数は約62,000人に上る（国際交流基金海外日本語教育機関調査2003より）。

国際交流基金は、これら中等教育機関に対してジュニア専門家を派遣し（2007年7月現在5地域5名⁽¹⁾）、インドネシア人高校日本語教師（以下「インドネシア人教師」）に対する支援を行っている。ジュニア専門家は、国際交流基金ジャカルタ日本文化センター（以下「ジャカルタセンター」）が実施するインドネシア人教師対象の研修への出講や、地域業務として、配属校勤務⁽²⁾、日本語教師会の支援、日本語の勉強会や小研修⁽³⁾の実施などに取り組んでいる。

筆者は、2005年にインドネシア派遣となり、その後2年間、上記のような業務に携わってきたが、教師研修に参加した教師の授業を観察していて⁽⁴⁾、その効果に疑問を感じることもある。研修の内容、方法の問題点もあるが、その他の原因として、彼らの持つビリーフと現状に齟齬

があるために、研修で得た知識が十分に生かせないのではないかと考えた。

現在、インドネシアの高校における日本語授業のカリキュラムでは、コミュニケーション能力を伸ばすことが重視され、研修でも、「コミュニケーションを目標とした授業の流れの理解」が目標とされている(藤長・古川・エフィ(2006))。しかし、教師の多くは、文法説明をメインとした講義形式の授業で日本語を学習しており、ゲームやインタビューといったコミュニケーションのための教室活動を使用した学習を自分自身が体験していない。この学習経験から、「文法説明が大切だ」「ゲームは遊んでいるようで教室では不適切だ」というビリーフが彼らの中に作られていれば、現在の教授法に対して違和感を覚え、いくら研修で学んでも実際の授業に取り入れられないであろう。

さらに、教師研修を実施する側が、インドネシア人教師のビリーフを知らず、結果としてそれを無視した形で講義を行っても、知識の定着は難しい。研修する側が参加者のビリーフを把握した上で研修内容を検討し、提供することが必要であると考えます。

本稿では、インドネシア人教師を対象として実施したビリーフ調査結果から、研修に関わる項目を報告する。そこから、今後の研修の改善点を検討することを目的としている。

2. 先行研究

1980年代後半から、学習者を中心とする考え方が浸透するとともに、学習者のビリーフを調査し、それを理解した上で教授活動を行おうとする動きが広まってきた。Horwitz(1987)が指摘するように、学習者のビリーフは教室活動への取り組みやストラテジーに大きな影響を及ぼすためである。

Horwitz(1987)は、学習者のビリーフを「言語学習の適性」、「言語学習の難易度」、「言語学習の性質」、「コミュニケーション・ストラテジー」、「言語学習の動機」で5分類したBALLI(Beliefs About Language Learning Inventory)を使用し、成人ESLの学習者を対象としてビリーフ調査を行った。日本語教育でも、BALLIを利用したビリーフ調査が行われ、板井(1999、2000)、山本(1999)、片桐(2005)、和田(2007)などにより、さまざまな国の学習者の持つビリーフが明らかにされてきている。

BALLIを援用したビリーフ調査は、学習者だけでなく、教師に対しても進められ、海外における日本人教師とノンネイティブ教師の協力体制円滑化や教師研修、教材開発などの基礎データとされている。岡崎(2001)は、日本人教師と中国人教師の円滑な連携のために、日本人日本語教師と中国人日本語教師のビリーフを比較検討し、日本人教師には教養としての、中国人教師には実用としての外国語学習を志向する傾向が強いことを明らかにした。若井・岩澤(2004)では、ハンガリー人日本語学習者のビリーフの傾向を分析するとともに、ハンガリー人教師と日本人教師のビリーフを調べた。その結果、ハンガリー人教師については、自分がな

ぜそのようなビリーフを持つに至ったかを振り返ることで、教師としての自分自身の役割について捉えなおす必要があり、日本人教師については、ハンガリー人学習者とのビリーフの隔たりに注意を向ける必要があると提言している。木谷（1998）は、極東ロシアの学生の言語学習観を調べ、その分析結果を基に今後の教師研修の内容や方法を考案している。例えば、従来極東ロシアの学習者は正確な日本語運用を重視すると思われていたが、間違いや誤りに対する寛容度も比較的高く、コミュニケーション重視の教室活動にも積極的に参加できる可能性があることがわかった。そのため、今後はそれを実現できるような具体的な教室活動をロシア人教師とともに考える必要があると考察している。久保田（2005、2006）は、単一に捉えられがちな海外に対する日本語支援をより効果的にするために、ノンネイティブ日本語教師のビリーフを調査した。その結果、教授対象別分析においては、指導内容に関する項目について初等教育に携わる教師に特徴的な傾向が見られ、地域別分析においては、国によって異なる傾向が現れた。特に「正確さ志向」への「地域」の影響は大きく、各地域の言語教育の方針との関係が示唆された。

以上のような教師に対するビリーフ調査の流れの一環として、本稿では、インドネシアにおいて現在実施している研修内容及び方法の改善の参考とするために、インドネシア人高校教師を対象に、BALLIを利用したビリーフ調査を行った。

なお、先行研究においては、「BELIEFS」「ビリーフス」等の用語が使用されているが、本稿では「ビリーフ」で統一し、言語の学習や教授についての信念や考え方を指すものとする。

3．教師研修の概要

ジャカルタセンターは、インドネシア教育質保証センター（PPPPTK Bahasa）と共催で、年に1～2回、普通高校・宗教高校の現職日本語教師向け研修を実施しており、各地域から将来有望とされるインドネシア人教師が参加している。経験の浅い教師を対象とした基礎研修と、基礎研修を優秀な成績で終了した教師を対象とした継続研修があり⁽⁵⁾、どちらも期間は2週間で、うち一週間は日本語演習、もう一週間は教授法演習（教案の書き方、評価法等）に充てている（実施経緯、詳細は藤長・古川・エフィ（2006）参照）。

この教授法演習で目標とされる教授法及び授業内容は、インドネシア国家教育省が作成するカリキュラムに準拠している。カリキュラムはおおよそ10年ごとに改訂されているが⁽⁶⁾、1994年改訂以降は話題シラバスが採用され、外国語学習の目標をコミュニケーション能力の養成に置いている。ここでは、テーマに沿って場面を設定してコミュニケーション練習を行うことが求められており、このコミュニケーション重視の考え方は現行の2004年カリキュラム⁽⁷⁾にも継承されている（藤長・古川・エフィ（2006）参照）。

上記教師研修において、基本の形として提示している授業の流れは、「導入 基本練習 応

用練習」である。これは、国際交流基金(2007)でも「コミュニケーション能力を育てる授業」として紹介されている。各段階の目的は以下のとおりである(国際交流基金2007:13)。

導入:学習項目の形と意味を理解する

基本練習:(1) 学習項目の形を正しく言ったり書いたりできるように練習する

(2) 学習項目の形を、意味と結びつけて正しく言ったり書いたりできるように練習する

応用練習:実際のコミュニケーションでの使い方を練習する

基本練習では、「反復練習」「代入練習」「変換練習」などのオーディオリンガルの練習方法を用いて、クラス全体やグループでの一斉練習や個人練習を行うよう指導している。それに続く応用練習では、「ゲーム」「ロールプレイ」「インフォメーションギャップ」「インタビュー」といった活動が取り入れられ、基本練習で覚えた文型を実際に使ってみる場を学習者に与えている。

本稿では、この授業の流れと、コミュニケーション重視という目標について、インドネシア人教師がどのようなビリーフを持っているかを調査対象としている。

4. 調査方法

調査項目は、「外国語学習の性質」「学習スタイル」「コミュニケーション・ストラテジー」「教師の役割」「媒介語」「文字学習」「高校での外国語教育の目的」「文化と言語」の8分類53項目である(詳細は添付資料参照)。「外国語学習の性質」「コミュニケーション・ストラテジー」についてはHorwitz(1987)、「学習スタイル」「教師の役割」「媒介語」については板井(1999)、「文字学習」については片桐(2005)、「文化と言語」については板井(1997)を主に参考とし、質問の文言をインドネシアの実情に合わせて加筆・追加した。対象者がすべて高校の日本語教師であることから、「高校での外国語教育の目的」という調査項目群を追加している。なお、この分類は、必ずしも先行研究とは一致していない。

それぞれの質問に対して、1「強く賛成する」、2「賛成する」、3「賛成でも反対でもない」、4「反対する」、5「強く反対する」の5段階評定方式で回答することとした。また、回答に際して、教師としてではなく、「学習者の立場で答えること」を求めた。これは、「教師としてかくあるべき」といった、理想像にとらわれることのないビリーフを引き出すことを目的としている。調査用紙にはインドネシア語を使用している。

今回のアンケートは記名式を採用した。これは本調査をビリーフ調査のみに終わらせることなく、今後の教師指導のデータとして使用するためである。

ビリーフ調査と同時に、年齢、日本語学習歴、日本語教授歴、研修参加歴、日本語能力等を調査しているが、本稿ではその結果を分析の対象としていない。

5．調査対象者

西ジャワ州、東ジャワ州の高校で教えるインドネシア人教師に調査用紙を配布し、156名から回答を得た。西ジャワ州が85名、東ジャワ州が71名である。

6．調査期間

西ジャワ州では、ビリーフ調査用紙を2007年1月30日の日本語教師会で配布し、2月半ばまでに筆者に郵送するよう指示をした。東ジャワ州では、2007年1月から4月までに行われた東ジャワ州日本語教師会や、各地方都市で行われる教師会支部の勉強会で調査用紙を配布し、記入を依頼した。

7．調査結果と分析

ビリーフ調査の結果を報告する。

以下の2点を分析の観点とし、それぞれに関係がある項目の調査結果を取り上げる。

- 1 高校の日本語教育カリキュラムが目指すコミュニケーション重視の授業を、インドネシア人教師は受け入れられるかどうか。
- 2 ジャカルタセンターの研修で扱われている授業の流れや授業方法を、インドネシア人教師は受け入れられるかどうか。

7.1 コミュニケーション重視の授業に関するビリーフ

コミュニケーション重視という目標に関係がある項目を「外国語学習⁽⁸⁾の性質」「学習スタイル」「コミュニケーション・ストラテジー」の調査項目群から取り出し、それぞれ表1から表3にまとめた。それぞれの傾向について見ていく。

以下、表中における網掛け部分は、各項目に対する回答の最頻値である。表中の「番号」は、調査用紙内での項目番号である。

「外国語学習の性質」から、コミュニケーション重視に関連のあるものを次頁表1にまとめた。これらに関しては、おおむね、コミュニケーション重視の授業に適したビリーフを持っていると考えられる結果が出ている。

カリキュラムについては、会話・文法どちらについても肯定的に捉えられているが、文法〔項目25、平均2.63（以下、〔 〕内の数値の表記は同様とする）〕より会話に賛意が強い〔22、2.32〕。「話す・聞く」〔37、1.47〕と「読む・書く」〔41、1.62〕についても、ともに強く賛成に傾いているが、「話す・聞く」の方がより重要だと考えられている。

その上で、授業内容についても、会話ができるようになるためには文法の学習だけでは十分ではなく、そのための会話練習が必要だと感じている〔45、3.21〕〔49、2.02〕。

表1 コミュニケーション重視の授業に関するピリフ(「外国語学習の性質」)

番号	質 問 項 目	強く賛成					平均
		強く反対					
		1	2	3	4	5	
22	日本語学習では、会話中心のカリキュラムが最もいい。	18	80	50	6	2	2.32
25	日本語学習では、文法中心のカリキュラムが最もいい。	11	57	68	16	3	2.63
37	日本語の学習では話したり聞いたりする練習が重要である。	85	70	0	1	0	1.47
41	日本語の学習では読んだり書いたりする練習が重要である。	63	90	3	0	0	1.62
45	会話練習をしなくても、学習した文法項目をつなげれば会話はできる。	8	29	53	55	11	3.21
49	文法や語彙だけ学習しても、会話の練習をしなかったら、日本語を話せるようにはならない。	37	89	23	4	3	2.02

次に、「学習スタイル」から2項目を取り上げ、表2に示した。

表2 コミュニケーション重視の授業に関するピリフ(「学習スタイル」)

番号	質 問 項 目	強く賛成					平均
		強く反対					
		1	2	3	4	5	
42	時間がかかっても、やさしい文型から難しい文型へ徐々に積み上げて学習していくほうが、最終的には実力がつく。	89	62	4	1	0	1.47
46	文型を積み上げるよりも、実際の生活の中でよく使う会話や表現を勉強したほうがいい。	7	36	65	44	4	3.01

ここで見る限りでは、コミュニケーション重視の授業とは異なる結果が現れている。文型を積み上げていく学習スタイル〔42、1.47〕の方が効果的と考えられており、会話や表現を学習することについては、やや否定寄りの見解を示している〔46、3.01〕。会話の練習は必要ではあるが、日本語の上達という側面で捉えると、会話より文法学習を重視するようである。

最後に、「コミュニケーション・ストラテジー」の分類の全ての項目の調査結果を表3に示す。これは、誤用や正確さの捉え方という点で、コミュニケーション重視の授業と関連が深いと考えるからである。

会話においては、正確さよりも通じることを重視し〔20、2.55〕、わからない語は推測することも是認している〔24、2.71〕。この回答からは「曖昧さの許容」が認められる。しかし、それ以外の項目からは、正確さに重きを置いていることが伺える。

発話の際には、発音にも〔50、1.72〕文法にも〔11、1.94〕正確さを求め、初級の段階から誤用訂正が必要であると考えている〔16、1.75〕。学習においても、曖昧なまま放置しておくことができず、詳細な文法説明を求める傾向にある〔4、1.69〕。これらの傾向は、上記の項

インドネシアにおける高校日本語教師研修に関する一考察

表3 コミュニケーション重視の授業に関するピリフ（「コミュニケーション・ストラテジー」）

番号	質 問 項 目	強く賛成					平均
		強く反対					
		1	2	3	4	5	
20	日本語を話すとき、文法的に間違っている、相手に通じればそれでいい。	15	71	45	19	6	2.55
24	日本語を読んだり聞いたりしているときにわからない語が出てきたら、その語の意味を推測してもかまわない。	6	73	47	20	10	2.71
50	正確な発音で日本語を話すことは重要である。	58	87	9	1	1	1.72
11	正確な文法で日本語を話すことは重要である。	52	73	22	7	2	1.94
16	日本語の学習をしていて、初級の段階で誤用が直されなかったら、それが中上級になっても残ってしまい、あとで直すことが難しくなる。	65	70	15	4	1	1.75
4	日本語を学習していて、文法についてよくわからない点が出てきたら、それをはっきりさせないと落ち着かない。	65	82	4	2	3	1.69

目20、24の回答に見られる「曖昧さの許容」の度合いよりも強い。

以上のことから、インドネシア人教師は、わからないことや間違いを許容するよりも、詳細な文法説明と誤用の訂正を好む傾向にあると言える。

7.2 授業方法に関するピリフ

次に、教師研修で扱っている授業の流れ、授業方法に対してどう考えているかを見る。

ここでは、3で述べた授業の流れの中の「基本練習」と「応用練習」についてのピリフを、「学習スタイル」から見る。

表4 授業方法（基本練習）に関するピリフ（「学習スタイル」）

番号	質 問 項 目	強く賛成					平均
		強く反対					
		1	2	3	4	5	
34	日本語の学習で、大量の反復練習は重要だ。	34	90	27	5	0	2.02
3	日本語を学習するとき、ひとりひとり言われる口頭練習は好きではない。	5	8	29	71	43	3.89
23	日本語学習の教室の口頭練習で、ひとりひとり言うよりもみんなでいっしょに言うほうが効果的だ。	28	51	44	29	4	2.55

基本練習に関連するピリフを上記表4にまとめた。

反復練習の重要性に賛意を示しており〔34、2.02〕、オーディオリンガルの方法を用いた基

本練習に抵抗はないという結果が出た。

項目3、23については、インドネシア人教師が行う授業の基本練習の中で、個別にあてて発話させるよりもクラス全体でコーラスさせることが多いことから調査項目とした。その結果、自分の好き嫌いでは、個別の練習は嫌いではないようである〔3、3.89〕。効果の面では、全体のコーラスの方が個別の練習より効果的だと考えている〔23、2.55〕という傾向が出たが、それほど強い賛意は見られず、数値に若干のばらつきが見られる。よって、基本練習で行っている全体（グループ）の一斉練習と個別練習のいずれについても、インドネシア人教師にはおおむね受け入れられると言える。

次に、応用練習に関連するピリフを表5で見る。これについても、研修で示されている授業方法は受け入れられると考えられる結果となった。ゲームなどの活動を好み〔7、3.83〕、それらに効果があると考えている〔30、1.87〕。また、自分が受けてきた講義形式の授業⁹⁾よりも今のコミュニケーション活動を取り入れた方法の方がいいと感じている〔8、3.78〕。

表5 授業方法（応用練習）に関するピリフ（「学習スタイル」）

番号	質 問 項 目	強く賛成					平均
		強く反対					
		1	2	3	4	5	
7	日本語学習のクラスで、ゲームなどの活動は勉強している気がしないから好きではない。	4	11	36	62	43	3.83
30	日本語の学習で、ゲームやペアワークを使った学習者同士の教室活動は効果がある。	40	97	19	0	0	1.87
8	日本語を学習するとき、自分で会話などの活動をするよりも、教師から講義形式で教えてもらうほうが自分には向いている。	2	8	53	52	41	3.78

8. 考察

上述の分析の観点についての調査結果を以下にまとめる。

- 1 高校の日本語教育カリキュラムが目指すコミュニケーション重視の授業を、インドネシア人教師は受け入れられるかどうか。

受け入れられると考えられる。しかしながら、彼らが好む学習スタイルやコミュニケーション・ストラテジーには、文法重視の姿勢が見られる。

- 2 ジャカルタセンターでの研修で扱われている授業の流れや授業方法を、インドネシア人教師は受け入れられるかどうか。

受け入れられると考えられる。自分が今まで受けてきた講義形式の授業よりもいいと感じている。

筆者の「インドネシア人教師は、現在のカリキュラムが目標とする授業に対して否定的なビリーフを持っている。だから、研修の効果が上がらない」という予想は、コミュニケーション重視という目的とその授業方法については覆された。しかし、学習スタイルやコミュニケーション・ストラテジーに見られる「文法重視の姿勢」に研修における今後の課題が指摘できると考える。

インドネシア人教師に文法を重んじる傾向があることは、久保田（2007）で指摘されており、本調査での「文法シラバス」に対する賛意の高さや、「文法積み上げ」「正確な文法で話すこと」への肯定にもそれが伺える。こうした文法を重んじる姿勢は、ビリーフ調査の結果のみならず、彼らが講義形式の文法説明をメインとした日本語学習経験を持っていることや、1984年の高校カリキュラムでは構造シラバスが採用されていたということにも反映されており、インドネシアの語学学習に関しての一般的な傾向と捉えてよからう。そういった土台に、コミュニケーション重視という考え方が、国家教育省によって、いわば上から与えられる形でカリキュラムに導入されたのが、現在の状況である。つまり、インドネシア人教師、広くはインドネシア人にとって、現在の語学学習のスタイルは、まだ歴史の浅い新しいものである。

このような背景を踏まえた上で、もう一度インドネシア人教師のビリーフを見ると、彼らは、漠然と「会話練習は大切か」と問われれば「大切だ」と答えるが、より踏み込んで学習スタイルを問うと「会話表現を学ぶより文法を積み上げた方がいい」と考えていることがわかる。さらに、具体的に「誤用について」「正確さについて」といった記述で問いかけると「間違いの訂正はすべきだ」「正確さは大切だ」と答え、感覚的に「どう感じるか」というと「わからないと落ち着かない」となる。つまり、上から新たに与えられた「会話」「コミュニケーション」というものを、漠然と「いいもの」「大切なもの」と考えてはいる。しかしそれが具体的な教室活動にどう結びつくのか、従来の方法と何が違うのかということまで理解できていないのではないだろうか。そうであれば、例えば文法や発音の間違いを会話の練習中に訂正しすぎれば、コミュニケーション活動の進行を阻むことになるということには考えが至らないであろう。この、彼らの持つ全体像と細部への認識の違いが、彼らの授業や言動に表れ、筆者の目には、「研修の効果が無い」と映ってしまっているのではないかと。つまり、彼らがコミュニケーション重視の授業を「ビリーフで否定しているからしない」のではなく、「全体的にビリーフで肯定しているけれども、具体的な実現の方法がまだよくわかっていないから実行しない」ということが問題点として指摘できるのである。

このような状況が、インドネシア人教師が学習者としてコミュニケーションを重視した授業を経験したことがないことに起因すると言えなくもない。具体的なイメージを持っていないところに、にわかに実践的な研修を受けても、定着が難しいのはやむをえないことであろう。しかしそれは、現在行っている研修の中で、「文法重視の学習方法と現在の方法との違い」や「コ

コミュニケーション能力を伸ばすための具体的な活動」を、十分に伝えられていないということを示しており、それが今後の研修において改善すべき点となるのではないかと。

本調査の結論として、今後の研修内容の課題について考えたい。

9. 研修における今後の課題

研修における今後の課題として、以下に2点挙げる。

- 1 コミュニケーションを目標とした授業を行うためには、どのような教授行動を取ればよいか理解できるような教授法の授業を取り入れる。

今回の調査結果から、インドネシア人教師は、高校のカリキュラムが目指す授業を受け入れられると示唆された一方、誤用訂正など具体的な教授行動に関してはそれほどコミュニケーションを重視した姿勢を持っていないことがわかった。そのため、コミュニケーションを目標とした授業というのは、どのような教授行動に繋がるのか理論的な背景を補強する必要があるだろう。また、実際の授業でそのような行動を取ることができるように、具体的な方法について話し合い、それを身につけることも大切である。これらの点について、従来の研修では扱われてこなかった。そこで、以上の点を実現させるための一つの案として、基本的な授業の流れをすでに理解している教師を対象とした継続研修の改善が考えられる。主に経験の浅い教師を対象とした基礎研修では、まずは授業の流れの理解に重点が置かれるため、理論的な側面から知識を扱う余裕がない。しかし、継続研修では、参加者はすでに基本的な授業の流れを理解しているため、教授法の理論的な授業や理論と具体的な教室活動との結びつきを話し合うことができると思われる。

- 2 コミュニケーション重視という授業方法を学習者として体験し、実際の高校での授業との関連を考える時間を設ける。

多くのインドネシア人教師は、自身が日本語を学習した際にコミュニケーション重視の授業を受けた経験がない。そのため、主にジュニア専門家が担当する研修の日本語演習の部分では、コミュニケーション重視の授業を行い、インドネシア人教師が学習者としてそれを体験できるようにする必要がある。そこで、従来は文法シラバスで行われてきた日本語演習を、2006年7月から2007年7月までの4回の基礎研修ではコミュニケーション重視の方法に変更した。その授業は、参加した教師からは「今までこのような授業は受けたことがなかった」「楽しかった」などの好評を得たが、筆者が授業観察をしたところ、その授業の方法を自身の授業に生かそうとした教師はほとんどいなかった。このことから、今後は、日本語演習と教授法との関連をより一層意識させる必要がある。具体的には、日本語演習の前にコミュニケーション重視の授業を行う目的を告げ、授業を体験したあとで、授業を分析したり、実際の授業へのつながりを考えたりする作業を取り入れることができるのではないだろうか。

以上の2点を課題とし、今後研修の改善に取り組んでいきたい。

謝辞：本稿で扱っているピリーフ調査用紙の調査項目の検討及びインドネシア語訳作成にあたり、インドネシア教育大学のSudjianto先生、Dewi Kusri先生、パジャジャラン大学のJon-jon Johana先生、国際交流基金ジャカルタ日本文化センターのEvi Lusiana先生にご協力いただきました。この場を借りてお礼を申し上げます。また、インドネシア教育大学派遣専門家山本晃彦先生には、原稿執筆に際して様々なコメントをいただきました。併せてお礼を申し上げます。

〔注〕

- (1) ジャカルタ周辺地域、西ジャワ州、中部ジャワ州、バリ州、北スラウェシ州に派遣されている。
- (2) 毎年2-3校の高校を選択し、そこへ通年で通い、インドネシア人教師とペアを組んで日本語の授業を担当する業務を指す。インドネシア人教師の教授能力向上を目的としている。
- (3) ジュニア専門家が各担当地域で1-2日間実施している研修を指す。教授法を主に扱っているが、内容・方法ともに地域によって異なる。
- (4) ジュニア専門家の業務として、教師研修に参加した教師に対して、研修のフォローアップを目的とした学校訪問及び授業観察を行っている。
- (5) 継続研修以上の研修に、中級研修・上級研修がある。中級研修は「インストラクター研修」という名称で2001年度に1回実施された。上級研修については現在の研修システムとなった1995年度以降実施されていない。
- (6) 近年のカリキュラム改訂は、1984年、1994年、2004年に実施されている。詳細は、藤長・古川・エフィ（2006）参照。
- (7) 06年度にもカリキュラムの一部改訂は行われているが、コミュニケーション重視の姿勢は変わっていない。
- (8) 調査項目群の分類名は「外国語」であるが、項目の文章内では「日本語」とした。設問に答える際に、インドネシア人教師にとってわかりやすくし、イメージが分散することを避けることが目的である。他の分類の項目についても同様に「日本語」とした。
- (9) ピリーフ調査と同時に行った日本語学習歴の調査の中で「学習形態」を問うたところ、西ジャワ州で85名中72名、東ジャワ州で71名中59名が「講義スタイル」を選択している。

〔参考文献〕

- 板井美佐（1997）「言語学習についての中国人学習者のBELIEFS 上海復旦大学のアンケート調査より」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』12号、63-88、筑波大学留学生センター
- （1999）「日本語学習についての中国人学習者のBELIEFS 香港城市大学のアンケート調査から分かったこと」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』14号、163-179、筑波大学留学生センター
- （2000）「中国人学習者の日本語学習に対するBELIEFSについて 香港4大学のアンケート調査から」『日本語教育』104号、69-78、日本語教育学会
- 岡崎智巳（2001）「母語話者教師と非母語話者教師のBELIEFS比較 日本と中国の日本語教師の場合」『日

- 本語教育』110号、110-119、日本語教育学会
- 片桐準二(2005)「フィリピンにおける日本語学習者の言語学習Beliefs」『国際交流基金日本語教育紀要』第1号、85-101、国際交流基金
- 木谷直之(1998)「極東ロシアの大学生の言語学習観について 海外日本語教師研修のための基礎データ作成を考える」『日本語国際センター紀要』第8号、95-109、国際交流基金
- 久保田美子(2005)「ノンネイティブ日本語教師のピリーフ調査 指導内容、指導方法を中心とした分析」『応用言語学研究 明海大学大学院応用言語学研究科紀要』7、163-176、明海大学大学院応用言語学研究科
- (2006)「ノンネイティブ日本語教師のピリーフ 因子分析にみる「正確さ志向」と「豊かさ志向」」『日本語教育』130号、90-99、日本語教育学会
- 国際交流基金(2007)国際交流基金日本語教授法シリーズ9『初級を教える』ひつじ書房
- 藤長かおる・古川嘉子・エフィ ルシアナ(2006)「インドネシアの高校日本語教師の成長を支援する教師研修プログラム」『国際交流基金日本語教育紀要』第2号、81-96、国際交流基金
- 山本そのこ(1999)「中・独日本語学習者のピリーフ比較 BALLI調査をもとに」『拓殖大学日本語紀要』9号、91-107、拓殖大学
- 若井誠二・岩澤和宏(2004)「ハンガリー人日本語学習者のピリーフス」『日本語国際センター紀要』第14号、123-140、国際交流基金
- 和田衣世(2007)「スリランカの大学生の言語学習ピリーフから日本語教育の改善を考える」『国際交流基金日本語教育紀要』第3号、13-28、国際交流基金
- Horwitz, E.K.(1987)“Surveying Students Beliefs About Language Learning” *Learner Strategies in Language Learning* ed. by Anita Wenden & Joan Rubin, London, 119-129, Prentice Hall International.

〔添付資料〕ピリーフ調査項目(日本語版・項目分類別)

項目番号は調査用紙上の項目番号である。

I 外国語学習の性質(13項目)

10. 日本語学習の最も重要な部分は語彙を学習することである。
14. 日本語学習の最も重要な部分は文法の学習である。
19. 日本語学習の最も重要な部分はインドネシア語からの翻訳の方法を学ぶことである。
22. 日本語学習では、会話中心のカリキュラムが最もいい。
25. 日本語学習では、文法中心のカリキュラムが最もいい。
1. インドネシア人より日本人の教師から日本語を学びたい。
29. 日本語は、日本人教師のほうがインドネシア人教師よりも上手に教えられる。
33. 日本語を学習するとき、インドネシア人同士で日本語を話しても効果がない。
37. 日本語の学習では話したり聞いたりする練習が重要である。
41. 日本語の学習では読んだり書いたりする練習が重要である。
45. 会話練習をしなくても、学習した文法項目をつなげれば会話はできる。
49. 文法や語彙だけ学習しても、会話の練習をしなかったら、日本語を話せるようにはならない。
9. 外国語の学習は楽しい。

II 学習スタイル(11項目)

2. 教科書を見ないで日本語を学習するとしたら不安を感じる。
15. テキストなしに日本語を勉強するのは不可能だ。

インドネシアにおける高校日本語教師研修に関する一考察

- 3. 日本語を学習するとき、ひとりひとり言われる口頭練習は好きではない。
 - 23. 日本語学習の教室の口頭練習で、ひとりひとり言うよりもみんなでいっしょに言うほうが効果的だ。
 - 7. 日本語学習のクラスで、ゲームなどの活動は勉強している気がしないから好きではない。
 - 8. 日本語を学習するとき、自分で会話などの活動をするよりも、教師から講義形式で教えてもらうほうが自分には向いている。
 - 30. 日本語の学習で、ゲームやペアワークを使った学習者同士の教室活動は効果がある。
 - 34. 日本語の学習で、大量の反復練習は重要だ。
 - 38. 日本語の学習で、カセットテープなどを使った練習は重要だ。
 - 42. 時間がかかっても、やさしい文型から難しい文型へ徐々に積み上げて学習していくほうが、最終的には実力がつく。
 - 46. 文型を積み上げるよりも、実際の生活の中でよく使う会話や表現を勉強したほうがいい。
- Ⅲ コミュニケーション・ストラテジー（6項目）
- 50. 正確な発音で日本語を話すことは重要である。
 - 11. 正確な文法で日本語を話すことは重要である。
 - 16. 日本語の学習をしていて、初級の段階で誤用が直されなかったら、それが中上級になっても残ってしまい、あとで直すことが難しくなる。
 - 20. 日本語を話すとき、文法的に間違っているけど、相手に通じればそれでいい。
 - 24. 日本語を読んだり聞いたりしているときにわからない語が出てきたら、その語の意味を推測してもかまわない。
 - 4. 日本語を学習していて、文法についてよくわからない点が出てきたら、それをはっきりさせないと落ち着かない。
- Ⅳ 教師の役割（9項目）
- 27. 教師なしに日本語を勉強するのは不可能だ。
 - 31. 教師はクラスでイニシアチブを取るべきだ。
 - 35. 教師は学習者に授業の内容を100%理解させる責任がある。
 - 39. 日本語の学習で、学習者の間違いは教師の責任だ。
 - 43. 日本語学習に進歩が見られなかったら、それは教師の責任だ。
 - 47. 日本語学習では、教師は知識を与えればよく、それを使えるようになるかどうかは自分の責任だ。
 - 51. 良い日本語教師というのは、日本語の文法についての知識をたくさん持っている教師だ。
 - 12. 良い日本語教師というのは、日本語を流暢に話せる教師だ。
 - 17. 日本語が流暢に話せなくても、上手に教えることはできる。
- Ⅴ 媒介語（4項目）
- 5. 日本語を学習するとき、文法や語彙の解説はインドネシア語を使ってほしい。
 - 6. 日本語を学習するとき、クラスで勉強する文は全てインドネシア語に翻訳してほしい。
 - 26. 日本語を教えるとき、教師はインドネシア語で文法を解説する必要はない。
 - 28. 日本語を学習するとき、学習者はクラスでなるべく学習している言葉を使って、インドネシア語を使わないようにするほうが早く上達する。
- Ⅵ 文字学習（2項目）
- 32. 日本語の学習のために、アルファベットを使えばいいので、ひらがなやカタカナなどを勉強しなくてもいい。
 - 36. 文字の学習は日本語学習の基本であり、ひらがななどの文字は必ず学習しなければならない。
- Ⅶ 高校での外国語教育の目的（4項目）

- 40. 高校での日本語教育の目的は、日本語で会話ができるようになることだ。
- 44. 高校での日本語教育の目的は、日本語の文法を知ることだ。
- 48. 高校での日本語教育の目的は、日本の文化を知ることだ。
- 52. 高校で日本語を学習することは、高校生の将来にとって有益なことだ。

Ⅷ 文化と言語(4項目)

- 53. 日本語の学習をすると、日本文化だけではなく、自分の(国の)文化についてもわかるようになる。
- 13. 日本語を教えるためには、教師は日本の文化についても知っている必要がある。
- 18. 文化や生活習慣の違いは日本語の授業の中で教えられるべきだ。
- 21. 日本文化を理解したかったら、日本語を学習することが重要だ。